



入江 信明氏
(千葉県総合企画部政策推進室)



松本 淳 氏
(JICA 地球ひろば)

平成十八年度通常総会開催

平成十八年度通常総会は、五月二十七日(土)午前十時より、はるプラザ千葉(千葉市)で開催されました。出席は会員二十九名、来賓五名計三十四名でした。品川会長の挨拶に続き、来賓代表としてJICA地球ひろば業務グループ長 松本 淳氏、および千葉県総合企画部政策推進室 国際政策グループ 入江信



品川会長(議長)、黒田副会長(司会)



総会会場風景

明氏よりご挨拶を頂きました。その内容は本会報の二頁に掲載してあります。さらにSV経験を活かす会理事長の掛川周男氏より総会へのメッセージが寄せられました。

講演者以外の来賓は千葉県総合企画部政策推進室国際政策グループ 早川夏子氏、青年海外協力隊千葉OB会長 吉田憲司氏およびJICA国際協力推進員 大山美砂子氏でした。



上田事務局長による新会員と
新帰国者紹介

平成十七年度活動報告、会計報告、会計監査報告が行われ、引き続き平成十八年度活動計画、予算案の審議および役員選出が行われました。いずれの議案も活発な質疑応答の後、原案どおり可決されました。書記に寺戸康隆氏と増田定雄氏が指名され、司会は黒田副会長があたりました。

品川会長から会員の現況（約七十名）と昨年度の活動概要紹介の後、今年度の活動方針として特にJICAと連携をした国際理解・開発教育分野での活動の推進を小委員会を作り検討していきたい、さらに会員向け広報活動の一層の強化をはかりたい、旨の挨拶がありました。

議事終了後、黒田副会長より昨年十一月と本年一月に新入会員に実施した意向調査の報告が行われ、次いで上田事務局長が新会員と新帰国者を紹介しました。十二時十五分に総会を終了、その後派遣国グループにわかれ懇親会が催されました。

第四回定例会のお知らせ
日時 十二月九日（土）
午前十時～正午
引続き懇親会を予定
はるるプラザ千葉
会場

政治文化して以来、JICAではこの三つの柱をテーマに掲げ、事業と組織のあり方について改革を推し進めてきました。改革二年目にあたる二〇〇五年からは、改革プラン第二弾として、国内の実施体制の強化を図っています。この改革の第一段階として二〇〇六年四月に、市民参加による国際協力の拠点としてJICA地球ひろば（旧広尾青年海外協力隊訓練所）が誕生しました。これに伴い、従来、青年海外協力隊事務局国内グループ啓発・社会還元チームが担当していた業務を整理し、ボランティア事業の普及及びボランティア参加促進に関する支援などを主に担当する部署として青年海外協力隊事務局国内グループにボランティア参加促進チームを新設し、帰国ボランティアの社会還元はJICA地球ひろば業務グループボランティアチームが新たに担当することとなりました。ボランティア体験の社会還元促進は、新設されたJICA地球ひろばの基本機能の一つであり、ボランティアチームの主要業務でもあります。また、OB会の支援はボランティア体験の社会還元促進の一環として、ボランティアチームが担当しています。このため、今後

特別寄稿
シニア海外ボランティアOB会に期待すること



「現場主義」
「人間の安全保
障」「効果・効率
性、迅速性」。

特別寄稿

シニア海外ボランティアOB会に期待すること

獨立行政法人 國際協力機構 青年海外協力隊事務局
事務局長 大塚 正明

は、従来からのJICA国内機関の連携促進担当部署との連携・調整に加えて、ぜひボランティアチームにも皆さんの活動ぶりをご報告いただき、JICAとしてのボランティア体験の社会還元促進の方針づくりにご協力いただきますようお願いいたします。

また、JICAボランティア事業の一連のサイクルからいえば、「ボランティア体験の社会還元」は決して単体で存在するものではなく、これを通じて多くの国民の国際協力に関する関心が惹起されることで、ボランティア事業を始めとした国民参加協力事業により多くの国民の参加が期待でき、これは開発途上国が抱える多様なニーズに対応するわが国としての対応の可能性を高めていくことにつながると考えています。そしてこれら国民参加協力事業の参加者が帰国後、「ボランティア体験の社会還元」を積極的に行うことで、再びサイクルがより大きな規模で進んでいくことを期待しています。このサイクルのうちどれかひとつの要素が欠けても効果的な国民参加協力事業の実践にはつながりません。貴会を始めとしたシニア海外ボランティア会の皆さんには、ぜひこのサイクルを意識しながら積極的な活動に取り組んでいってほしいと思います。

末筆ではありますが、貴会のもとへのご発展をお祈りするとともに、今後もJICAボランティア事業への変わらぬご支援とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

独立行政法人 国際協力機構 青年海外協力隊事務局
事務局長 大塚 正明

来賓代表ご挨拶

若い世代への

メッセージを

JICA地球ひろば

業務グループ長 松本 淳

千葉県JICAシニアボランティアの会平成十八年度総会の開催おめでとうございます。平素よりJICA事業にご協力賜り厚く御礼申し上げます。

既に日本国内での国際協力の推進にも力を入れてまいりました。特に教育現場での国際理解教育・開発教育につきましましては、青年海外協力隊やシニア海外ボランティアの方々にご協力いただき、JICAならではの貴重なご経験を伝えていただいております。千葉県JICAシニアボランティアの会の方々にも様々な機会にご協力いただき誠にありがとうございます。

さて、本年四月、緒方貞子理事長の強いリーダーシップにより、JICAのこれまでの経験と市民の皆様へ伝え、皆様の国際協力活動を応援する拠点として「JICA地球ひろば」を開いたしました。施設として、まず地球に暮らす様々な人々のことや厳しい現状を知っていただく展示コーナーができました。そして、国際協力に少しでも携わりたいと希望される皆様にご活用いただけるセミナールームや会議室を設定いたしました。各団体がご自分たちの活動を紹介できる企画展示コーナーもありました。また、わたし達には懐かし、一般の皆様には

は目新しいエスニック料理が食べられるレストランも併設されておりますので、是非ご利用ください。お陰様で昨日まで修学旅行生を中心として既に五千名の来場がありました。

なお、これまでJICAは「敷居が高い」と言われてきましたが、どうしたらよいのかはつきりわかりませんでした。目線を低くしなければならぬと頭では理解したつもりで実行できていない面もありました。結局は日々多くの方々との出会い、話し合い、共に事業を行なうようになるのではないかと考えるようになりました。

そのような場を提供するために「JICA地球ひろば」が果たす役割はいろいろあると考えています。市民とJICAだけではなく、むしろ市民と市民が出会い、更に大きな輪ができていくことを目指しております。セミナーや展示に様々な会合に利用していただきたいですし、ここから一般市民の皆様へ国際協力のメッセージを発信し、またここにメッセージが集まるという場に育てたいと思います。どうかシニア海外ボランティアの方々にも「JICA地球ひろば」を育てていただきたいとお願いいたします。

ところで、今さら申し上げることはありませんが、わたし達が育ってきた頃から日本社会が大きく変わり、「貧しさ」、「豊かさ」という言葉の意味を理解できる若者や子供はほとんどいないような時代になりました。人が生きるとはどういうことなのか、実例をもって子供たちへ教えることは難しいことでもあります。家庭も学校も役所も企業

も、お互いに分業しているのは結構なことですが、若い世代の人生全体については誰も責任を持たなくなつたかのような気がします。

「今の子供は恵まれていない」と言うのはむしろ皮肉でさえあります。幸福を実感できない不幸を背負っているようなものから。このような時代であるからこそ、生きることの実態について、開発途上国の人々がわたし達日本人へ教えてくれるものがあるのではないのでしょうか。その可能性を最も強く感じているのはJICAボランティアの方々だと思っております。

最近学校でも「生きる力」を身につけるといふようなことが言われているようですが、ここにお集まりのシニア海外ボランティアの方々には日本でも開発途上地域でも強く生きていく力をお持ちであることを証明されていらつしやいます。どうぞこれからも益々お元気で日本の将来を担う若者や子供たちをご指導いただきたいと思います。

繰り返しになりますが、日本の若い世代へのメッセージを送ることもわたし達JICAの責務と考えております。「JICA地球ひろば」という拠点ができましたことを最大限に活用いたしまして、JICAボランティア、大勢の方々が開発途上地域で苦勞されてきたことを広く市民の皆様へ伝えていきたいと願っております。今後とも協力よろしくお願いいたします。

最後になりましたが、千葉県JICAシニアボランティアの会の益々のご発展と会員の方々の益々のご健勝をお祈りいたしまして挨拶とさせていただきます。

千葉県の国際化に

SVの力を

千葉県政策推進室

国際政策グループ

入江 信明

千葉県JICAシニアボランティアの会「平成十八年度通常総会」の開催を心よりお祝い申し上げます。

県の国際政策に関しましては、昨年の定例会でご紹介させていただきました。私の経験から、シニアの皆様は知識と経験を県の国際化に生かす視点について、お話をさせていただきます。

現在、政策推進室国際政策グループは県政の国際化施策全体を見ていますが、私自身も商工労働部での職務経験が長く、例えば海外企業の誘致や県内企業の国際化の支援といった面で国際化施策を担当してきました。

一九九九年に同部経済政策課に国際経済班が新設されました。従来の貿易に加えて国際事業活動全般の振興を図ることになりました。しかし、私自身も公務員でビジネスの経験は無く、また国際経済情勢などの知識も薄弱でしたので、何から手を付けて良いものかと悩んでいました。

そこで、まずはニーズ調査を行おうと、国や外郭団体の国際化支援部門にヒアリングに行きましたところ、近年は中小企業でも海外ビジネスに積極的で、人的資源の乏しい彼らは情報やアドバイスを求めているとのことでした。しかし、我々にはアドバイスできるスキルが無く、そのための専門家を雇う予算もありませんでした。

そんな折、国から緊急雇用対策の予算が自治体にくることになり、これを使つて貿易、投資、提携等の海外取引アドバイザー制度を創設しようと考えました。幸いなことに事業は採択されたのですが、問題は経験豊富で優秀なアドバイザーに本当に来ていただけるか、ということでした。雇用条件は決して良いとは言えず心配していたのですが、そのときに分かったことは、千葉県内には海外で活躍してこられた商社やメーカーのOBの方々がたくさんお住まいで、その知識や経験を社会で生かしたいと考えておられることでした。

アドバイザー制度ができてから、多くの企業の皆様のご相談に対応し、新たな取引の成立等の成果を上げることができました。アドバイザーの方々も、これまで自らがビジネスを行っていたのですが、今回は第三者の立場で助言のみということでも、どこかしらを感じつつも、新たな経験に喜びと誇りも感じてもらえました。その後、緊急雇用対策事業は廃止となりましたが、この事業は県で予算化され、現在も県産業振興センター、ジェトロ千葉、あるいはNPOとの連携・協力ののもとに拡充されて行われています。

私自身はこのような経験から、県の国際化施策といつても県で直接出来ることは限られており、県内の多様な人材を活用していくことが重要であると考えています。JICAシニアボランティアの会の皆様は国際分野の知識、経験が豊富な方々です。どうか今後とも本県の国際化にご指導、ご協力の程よろしくお願い申し上げます。

会員寄稿

帰国後も熱さめず

後藤 優 (ラオス)

ラオスの地方都市サバナケットの技術短大でグループプロジェクトの活動を終えて二〇〇三年二月帰国し二年半以上経った。過去数十年途上国の仕事をした際ラオスへの関心は低く出張することになったが、今はラオスに関するどんな小さな新聞記事も見逃さない日々を送り、帰国後数回訪問現地の人達と旧交を温め、日本を訪問する人や留学生との交流を楽しんでいる。JICAや企業のレッテルのない自分に現地の人達がどんな対応をしてくれるか心配したがラオスの人達の変わらぬ交誼に感激している。

私がラオスに魅せられるのは人の心の豊かさに触れる機会が多かったからである。日本人と良く似た姿や顔の人達が家族の絆を大切に助け合って暮らしており、当時統計上の所得が一人一日一ドル以下で教師の月給が二十〜三十ドルという現実にも拘わらず人々は穏やかであった。持てる者が貧しい者に分け与える日常生活は毎朝六時頃各家が僧侶に対し路上でお布施を行う習慣にも窺えた。私達のボ



ランティア援助を受け度や振る舞いに好感がもて、人間性の価値が金銭では計ら

れないことを何度も感じさせられた。

しかし赴任当初は多少戸惑いを感じたのも事実である。私達は新規派遣で現地政府の要望による派遣だったが、当初は一部教師には私達の活動を素直に受け入れることに抵抗感があつた。日本の技術者がソ連製の実習機材を使ってロシア留学経験者を中心とした教師陣を指導するという厳しい状況だった。私は、教師達の対応や意識の変化特に教育環境の改善や機材提供を快く受け入れてくれる経過に注目した。ラオス人は過去半世紀以上も仏・米・露の支配や指導の下で抵抗と内戦を繰り返して、心の底に過去の深い傷をしまい込みながら、やっと手に入れた現在の平和と穏やかな生活を静かに送っている。私達は、人間関係の構築に多くの労力を費やし、彼等を決して傷つけないよう細心の注意を払って付き合ったので、一旦信頼関係が築かれると気持ち良く打ち解けたのである。

ラオスは残されたユートピアの国と言える。裸足で歩き木登りや水浴びをする子供達の眼は輝き、学生は素直で真面目だ。私達の終戦直後の生活を彷彿とさせるものがある。有名な名所旧跡や観光地は少ないが、ベトナム戦争の傷跡、メコン川の美しさ、主食のもち米の美味しさ、絹や綿の織物のこと、人々の暮らし等を友人や知人に説明すると皆ラオスに行ってみたと言っている。現に彼等の多くが妻や私の旅行計画を待っている。私はJICAのボランティア経験からラオスに知人を得て交

流し、ラオスの良さを共有した当時のボランティア仲間との親交も楽しんでいる。この楽しさは今後も続くであろう。

ホンジュラスの思い出

有光武臣 (ホンジュラス)

二〇〇三年四月、私はJICAのシニア海外ボランティアとしてホンジュラスにやってきました。

思い起こすと、前年秋に願書を出してから審査、派遣前の講習など順調に事が運び翌年四月一日には成田発のコンチネンタル航空機に乗っていた。かねて夢見たシニアボランティアの始まりである。

テグシガルバ

私がこの国で最初に降り立った街。それだけに見るものすべて新鮮で興味深かった。私の任地はここから三キロ東、サモラノにあるパンアメリカン農業大学。そこで園芸学科のコンサルタントとして野菜のハウス栽培を一年間指導することとなったのだが、赴任前の準備でこの街に滞在していた。その後サモラノに移り農業大学での所定の業務を終わり翌年四月に帰国した。

サモラノでの活動や生活、人々との交流などについては多くの楽しい思い出があるが紙面の都合もあり、本稿では割愛する。



帰国後すでに二年あまりを経過

して、なお忘れがたく記憶にのこるテグシガルバの風物などを断片的に書き記しておきたい。

坂のある街

テグシガルバは坂の街。大聖堂のあるあたりをセントロ(街の中心部)というがこのあたりがもっとも低く、すり鉢にたとえたとその底にあたる。どこへ行くにも坂が多く、またこの街が標高千メートル弱の高地にあるため歩くと息がきれる。タクシーを利用するには、メーターがついてないため乗る前に価格交渉が必要になる。クアント・クエスタ？

花

この時期は乾期の終りの時期。土地人がアカシヤと呼ぶ木の花が咲き始める。日に日に樹の頂が真紅の花房で覆われ、およそ三ヶ月も咲き続けるのだ。火炎樹である。ブーゲンビレアはナポレオンと呼ばれる。日本では鉢植えなどで見られるが、ここでは地植えで生垣や玉造りにされている。気候にめぐまれていくだけに生育旺盛で、一面に樹幹を覆う赤やピンクの花(葉)は見事というほかはない。

ハチドリ

ホテルの庭の灌木の花に毎朝やってきた。空中静止して上手に蜜を吸う。思ったより小型で色も地味。珍しくて見入ってしまう。

バカルデー

ロンとともによく飲んでいたラム酒の銘柄。ビールはメキシコ産のコロナが旨かった。

ホテルの窓からほろ酔いの目で夜景を見る。風が強いのであろう、山の稜線を雲が吹き飛ばすように流れていった。すり鉢の内側のような斜面に人家、街路灯の無数の灯りが風の向きに

沿って揺れながら煌めいてみえた。こんな光景を今も感傷的に思い出すのです。

日系移民に拍手喝采

須郷隆雄 (アルゼンチン)

アルゼンチンには現在、日系移民家族が二万人ほどいる。そのうちの約七十割を沖縄移民が占める。

アルゼンチンへの移民は、一九〇八年に開始された大規模なブラジル移民の影響を受け、徐々に増えていったと言われている。沖縄からの戦後最初の移民はアルゼンチンに向かった三十三人であったという。大部分が単身か夫婦による自由移民で、職業も他国とは違い、洗濯業や花卉園芸業を中心とする都市型のものであった。当時はこの両職業が、全体の八十割を占めていたようだ。しかし、二世三世に世代が移るに従い、他分野での活躍が増えている。

沖縄移民の歴史は、一九〇〇年(明治三十三年)にハワイに旅立った二十六人が最初だといえる。日本本土からの移民に遅れること十五年であった。移民誌によると沖縄から海外に移した者は、十五万人に及ぶといわれている。ハワイ、ブラジルが



多くアルゼンチンは七千人であった。これだけ多くの移民を出した沖縄

には、それなりの理由がある。十四世紀から十九世紀にかけての琉球王国、そして第二次大戦後のアメリカ統治、それに加えて生活の苦しさや人々を夢の海外へと導いたのだから。

しかし、夢の楽園といわれた移民地も、決して豊かなものではなかった。血と汗の塗炭の苦しみであったと聞く。過酷な移民地で生活を築きあげることが出来たのは「故郷を忘れない思い」であった。この思いは「やがて県人同士の絆を深め、いまや強固な沖縄県人会が組織されている。また、戦争によって想像を絶する苦しみの体験もしたようだ。母国、故郷と戦わねばならない悲しみ、移民国への忠誠、さらに財産の没収と収容所送りなど、話を聞くと涙が溢れるばかりだ。米国では、最も危険なヨーロッパの最前線に、日系人だけで組織された「第百大隊」・「第四四二戦闘連隊」が送られた。彼らは米国への忠誠の証と家族の身の安全を願って、果敢に戦った。今でもその部隊の活躍は米国民の語り草となっている。唯一の地上戦となった沖縄では、沖縄系二世の兵士が通訳として活躍し、千名余りの集団自決が免れたとも言われている。戦争で焼け野原になった沖縄にいち早く支援の手を差し伸べたのは、なんと故郷を離れて暮らす移民の人々であった。「血の繋がる郷里の人々を救え」を合言葉に、ハワイをはじめ北米、南米で、戦災地沖縄への救援活動が起ったことだ。

「出入国管理及び難民認定法」の改正以後、南米から日本

へ出稼ぎに来る日系人が増えている。既に二世、三世、四世の時代に入っており、日本の風土や習慣を理解しないまま、また、日本語も殆ど話せない状態で来日することから、状況は違うにしても、最初の移民者と同様の当惑と苦しみを味わっている。今こそ先達の移民者の苦勞に報い、時代を超えてその末裔に恩返しをする責務が日本にはあるような気がする。

日本にいれば移民のことは余り話題にならないが、海外で生活する者にとつて日本はかけがえの無い祖国であり、日本人以上には日本を意識しているのかもしれない。アルゼンチンでは、日本人は信頼と尊敬の念で迎えられている。この基盤を作ったのは言うまでも無く彼ら移民の功績であり、日本人としての誇りであったと思う。今一度、海外で活躍する日系移民者に我々日本人は目を向け、その生活を理解し、汗と涙で築きあげた「信頼」という財産に拍手喝采を送りたい。

会員 寄稿

(帰国報告会報告内容)

コルドバ赴任・そして

福井凱男 (アルゼンチン)

タンゴで有名なアルゼンチン第二の都市コルドバで活動した二年間は、アジアに比べて大人の文化と経済政策の失敗から来る挫折感からなかなか立ち直れ



ない人々に、明日の夢に向かつて一歩づつ進もうという日本人としての楽天性の発揮から対話が始まりました。

なにしろもともと豊かな大國であつたわけですから国民はアルゼンチンは政治家が國を憂えて清潔な政治を進めてくれればこの國は南米の指導的な國に昇れることを知っています。けれどもこれまでのペロニスト党派の無計画な貧民層へのばら撒き政策では國の活力がますます衰えて行くことも知っています。

この國でのJICA活動は草の根活動をはじめ、この國への取り組みは並々ならぬものがありました。特に医療分野や農業振興のための技術指導やペレイ養殖事業への取り組みは大きな成果を上げて来ましたが、これらのプロジェクトは長い時間と資金が掛かります。

私の指導テーマは異分野の「加工食品のアジア向け輸出振興」でした。直接の所属先は州の輸出振興機関でしたが、実際には中小企業の経営者に輸出のための最短の道筋を指導するものでした。

輸出と言うものは、競争力のある商品をつくるのが前提ですが、そのためには経営者がマーケティングを見て、その國の需要家の声を聞かなければなりません。アルゼンチンの企業家はお客が欲しければ買いに来るという殿様商売をやってきました

から、ワインひとつをとってもチリよりもはるかに大量の生産量を誇り、ブドウの品質も優れているにも拘わらず、日本市場ではチリワインが成功するのを指を銜えて見てきた経過がありました。

日本市場に売りたければまず日本の市場を見てほしい。そこでコルドバ州の意欲のある会社を選んでグループ参加で幕張のフーデックスに参加してもらいました。参加したのはハチミツ、オリーブオイル、ビナグレ(酢)の六メーカーでした。

この食品展参加で日本の需要家がコルドバから欲しがっているものは、オリーブオイルでありそして設備の関係で出展出来なかったチーズであることが判明しました。ブリスに訪れてくれたバイヤーには、その後サンブル提供や見積もり作業を通してコンタクトが続いています。

QC活動ではアルゼンチンのメーカーはまだまだ世界の水準に達していない側面は多々あります。HACCPとISO9000の導入が遅れている面もあります。けれども豊かな天然資源に恵まれ今後も安定的な供給が続けられるアルゼンチンからの食料調達と加工食品の輸入は日本にとつても将来的な国益につながる側面があります。

何よりもアルゼンチンの人々は親日的であります。日露戦争以来の歴史的な友好関係もありまして、日系社会の戦前から築いてきたアルゼンチン社会に置ける信頼関係はこれからは変わらないことでしょう。

私はJICA SVとしての任務は果たして帰国しましたが、

今後も継続してアルゼンチン産品の輸出振興に協力してゆくつもりであります。

人間本来の時間の流れる

パプアニューギニア

中島敏雄(ポートモレスビー)



JICA SVとして平成十六年四月から十八年四月までパプアニューギニアの首都ポートモレスビーに滞在しました。

パプアニューギニアが東半分を占めるニューギニア島は太平洋で一番大きな島、そして地球最後の秘境と言われています。

同国は七、八十年前に山岳地帯で未知の部族が発見されたように(映画にもなったFIRST CONTACT) 外界との接触の歴史が極めて浅い国です。わずかに、この一、二世代の間に西欧式文明社会システムが内陸部にも導入されました。その前は原始的な生活、いわゆる新石器時代のような生活をしてきた人々もたくさんいるわけです。

いわばタイムカプセルに乗って、一万年前から、この文明社会に突然飛び込み、自動車、飛行機、また銀行などのインフラ的な世界と直面し、伝統的価値観と近代的価値観とが混在した中で生活しています。まだ国民の約八十五割が自給自足の生

活をしています。

こうした環境下で製造業と言えるほどのものは、一部を除き、まだ育成されておられません。経済は金、原油、銅等の天然資源輸出に大きく依存し、米、食肉、日用雑貨生活用品を輸入する植民地型です。現在は貿易収支は黒字ですが近い将来、現在輸出している天然資源は枯渇すると予想され、これに代わる新規輸出商材の開拓、確保が急務です。将来的に持続可能な商材発掘は、今しなければなりません。これが私に課せられた大きな任務でした。

同国の農村地区の生活上の為にはコーヒー、バナナ、スパイス等の農産品輸出が有効と判断し、派遣先に赴任後、直ちに山岳地帯のコーヒー栽培地実態調査、またラバウル地区でのスパイスを中心としたワークショッップを開催しました。特にコーヒーについては、従来品は酸味が強く、またミディアムローストを好む日本人の嗜好には合わないと言われていました。最近の日本におけるダークローストを紹介したシアトル系コーヒーの台頭により、パプアニューギニア産コーヒーを「スペシャルティコーヒー」として売り込むには、今が千載一遇の好機と考え、JETROやPIC（国際機関太平洋諸島センター）の絶大なる支援を仰ぎコーヒー輸出拡大プログラムを最重要案件の一つとして取り組みました。

具体的には日本から国際的なコーヒー専門家を含む、JETRO理事をリーダーとした本格的な経済ミッションをパプア

ニューギニアに招聘し、主要産地でのコーヒー栽培、テースティングに関するワークショッップを開催、また幕張で開催された国際見本市（FOODEX JAPAN）にコーヒーを中心に出展させました。これらのプログラム終了後、フオローアッププログラムを編成し、パプアニューギニアよりコーヒー使節団を東京、大阪、神戸に派遣し、コーヒー焙煎業者、メーカー、商社、専門家との意見交換、視察、及び商談を実施することにより、同国の対日向け輸出マインドは一段と高まり、日本での販路開拓に成功し、着実に成果を上げることができました。

現在、私の発案で「日本でパプアニューギニアコーヒーの販売シェア五割確保を目指す」（現状は僅か一割）を合言葉に派遣先であるIPA（投資促進公社）の仲間は日夜、一丸となり目標に向かい輸出拡大に取り組んでいます。

私の帰国の際には、自らの力でパプアニューギニアの農村地区の生活上の為の尖兵なることを誓い合いました。非常に嬉しい感動の瞬間でした。これからも、生涯、彼らを見守ってゆく所存です。

バンコクでのJICAシニア海外ボランティア活動

寺田博義（タイ）

今回のボランティア活動は私にとっては初めての経験で、この活動を通じて体験しました



「仕事」と「心に残る思い出や新しい経験」を主体にご報告させていただきます。

任期は平成十六年四月七日から十八年四月六日までの二年間で、配属先はバンコク都内の工業省／基礎産業・鉱業局／基礎産業部でした。十七年八月までの一年五ヶ月は当初のテーマであり「環境処理（冶金）」具体的な「中小規模の金属産業（鉄鋼・非鉄産業）の環境保全のためのマスタープランの作成」に取組みました。そして後半帰国までの七ヶ月は受入先の事情（人事異動など）で「セラミックスの材料開発」に変更することになった。私の過去の業務経験もあることから受容れることと致しました。私の主な業務は一つのテーマとも「工場、作業場の視察」、「視察現場での質疑応答」、「配属先の職場から要請を受けた「技術的な事項の説明会の開催」（例えば日本の環境政策の概要、岩塩鉱山で使用される重機械類の腐食対策等合計九項目）でした。

前者のテーマにつきましてはマスタープランのタタキ台を念頭に平成十六年版の日本の環境白書と経済産業白書をもとに、その要約版を作成し報告会で説明して、将来のマスタープラン作りの参考にしてくれることを期待しました。また日本とタイとの環境基準値の比較表を作成してタイ側の基準値の空白部分を明確にしました。後者の

テーマにつきましては、私案としての「開発の進め方」を作成し説明しました。

一方、生活面については、自宅アパートはバンコクの中心部で日本人が多数居住するスクンビット地区にあり、二十四時間の警備員による監視付きで治安も良く、高架鉄道、地下鉄、バスが手軽に利用できました。和食レストラン、居酒屋などは選択に迷うほどに豊富で、和食材を扱うスーパーもあり食生活の面では何の不自由もありませんでした。値段がタイの料理や食材に比べて割高であることが難点でした。大雑把な感覚ではバンコクの生活費はざっと日本の三分の一でした。日常のコミュニケーションは職場では英語、大店舗では英語とタイ語、屋台などではタイ語を使いました。カラオケも日本でお馴染みのBIG ECHOが進出、日本の歌が置いてあります。床屋は日本のQBハウスがあり、十五分間百バツ（約三百円、日本の店は千円）で調整できます。

新しい経験としては、①日常生活に溶け込んだ熱心な仏教信仰との出会い②自宅アパートでの職場の人達とのホームパーティーを通じた日本とタイの文化の分ち合い③仕事を離れた個人的な友人としての出会い④タイマッサージの勉強⑤三月月の出来る位置の日本との違い⑥義理チョコの無いバレンタインデーという六つの体験をすることが出来、忘れられない思い出となりました。今回の貴重な体験をさせて下さったJICAに対して、心からの感謝と同時に御礼を申し上げます。

ベトナム寸描 その光と影

片岡 工（ベトナム）



指導科目は「企業管理」。仕事はベトナム企業（主として国営企業）の経営指導、助言ということ。従って帰国報告としては、ベトナム企業の実態やベトナムの経済環境などについて述べるのが妥当かと思うが、この種の情報は多くの投資セミナーなどで紹介されているためこの限られた紙面では割愛し、別な角度からベトナムを寸描してみたい。

経済発展の遅れ

ベトナムはインドシナ半島の東端に位置し南北に細長く伸びる国土に約八千万人の人口を有する国家である。一般に顔つきは日本人に似ており親近感を覚える。古来中国文化の影響下にあり日常的行動規範として儒教、仏教の影響も見られる。言い換えれば家族的結合強く、一般に温和でかつ勤勉。協調性もあり組織順応性も高い。にもかかわらず何故経済発展では同じインドシナ半島上の近隣国、マレーシア・タイなどに大きく遅れているのか、何故かくも貧しいのか？

GDP比較 (US\$ / 年/人)

マレーシア	4,000
タイ	2,000
中国	1,300
ベトナム	500

(2003年概数値)

この疑問について自分なりに考えてみた。

遅れの原因
まず誰もが思いつくのは第二次大戦後に成立し今日に続いている社会主義体制であろう。ソビエト崩壊や中国の改革開放運動の影響を受けて一九九〇年前後よりドイモイ（刷新）と称する改革運動、即ち市場主義経済の取り込みが進んできた。しかしながら、計画経済時代の残滓は今なお社会の隅々になお根深く残っており、speedyな発展の足枷となっている。

経済の大幅な立ち遅れのひとつの原因としてはベトナム戦争を含む長年にわたる戦争による甚大な戦禍を忘れてはなるまい。実は日本にも関係がある。日本軍は一九四一年にベトナムに侵攻しており四五年の敗戦に至るまでこの地を制圧していた。一九四四、四五年の凶作時、大量の食料を軍用備蓄として徴発し多くのベトナム人を餓死に追い込んだという。その数一説に二百万人といわれる。

日本軍の撤退後、植民地体制復活を図らんとするフランスとこれに抵抗するベトナム人との戦い、その調停策としてなされた南北の分断統治、南北再統一を図らんとするベトナムのゲリラ戦、これに対しベトナム全域の赤化を防がんとする米国の介入、ベトナム戦争の本格化・・・

このように日本軍進駐以来一九七五年の南北統一までの三十三年間殆ど間断なく自国本土上で戦争を余儀なくされてきたわけである。因みに最後のベトナム戦争の約十年間に米軍により

投下された爆弾量は千六百万トンと第二次大戦中に日本に落とされた爆弾十六万トン（原爆を除く）の百倍にも達する。全土の隅々まで焦土に帰したといえよう。言い換えれば戦後の経済復興のためのインフラは農村にいたるまで徹底的に破壊されていた・・・ということである。

光

機会をみて幾人かのベトナム青年に『日本軍のベトナム進駐について知っているかい？』と水を向けてみたことがある。彼らの答えは一樣に『もちろん知ってはいる。けど過去は過去。侵略者は結局全部追っ払ったんだから・・・もう済んだこと・・・』と意外なものであった。内心負い目を持って質問した筆者としては正直ほっと安堵すると同時にある種の感動を覚えたものである。

大戦に先立って約八十年間に及ぶフランスによる過酷な植民地体制、その後三十数年にわたる悲惨な戦禍をくぐったベトナム人として諸外国に対する恨み骨髄に達するものがあっても不思議ではないはず。にもかかわらず国家の政策や教育方針が前向きで開かれたものであることが若者達の反応で伺い知れる。

以上、現在のベトナム経済立ち遅れと貧困の主たる原因について簡単に触れたが他方この国の良質な人的資源、また人口の三分の二が戦後生まれの三十一才以下という若さの活力、前向きかつ善隣友好的国家政策などと相俟って遠からず近隣諸国に肩を並べる日がくることを信じている。

観光における任国事情

木村亮彦（パキスタン）

パキスタンの観光の現状

まずパキスタンの観光の現状を整理してみたい。

観光資源：モヘンジョダロ、ハラッパを始めとする西インドス文明遺跡、仏教の十字路と云われたガンダーラ文化遺跡及び伝統的イスラム文明の宗教的建造物並びに古城等歴史的・考古学的資源があり、K2峰、ラカポシ峰、クンジャラブ峠（パ・中国境）、フンザ地域、カイバル峠等のダイナミックな自然景観に恵まれている。

観光不振の理由：ホテルの量、質の不足、道路状態が悪い、経路のトイレ、休憩所、ショッピング施設が無い、遺跡の保存状態の悪化（モヘンジョダロ、ハラッパ等）

因みに二〇〇四年度の日本からの旅客は一万三千人で、日本人海外観光客総数約千八百万人の僅か〇・〇七%である。

日本人観光客への期待度、印象

日本人観光客への期待度を掴むため、ホテル業界、旅行業界、航空業界、土産物屋の団体、バス、鉄道など交通機関、政府関係者、観光資源所有地方自治体関係者等を対象に四回のレクチャーを行い、アンケートを取って見た。その結果は次のようだった。



・国民は親日的であり、日本人観光客を歓迎している

る。また日本人観光客は、どの国の旅客より良い印象を持たれている。

・日本人観光客は経済力があがり、高級なホテル、食事需要と高額の買い物が期待できる。

・今後、日本人旅行者の増大を期待したい。

・日本人についての印象は、

・大変組織化された礼儀正しい国民である。

・ホテル、トイレ、観光施設などの清潔さと親切なサービスを期待する。

・大人しく些細なことに苦情を言わない。また旅行が終わってから苦情が出る。

パキスタン政府観光省への提言

競合する観光地が多くある中で、日本人旅客の増大を期待するならば、パキスタンの観光資源の瑕疵（ホテルの貧困さ、道路ガードレール、階段の手摺の不備など安全面での配慮不足、トイレの不備、ショッピングエリアの未整備等）もあるが、多分に政治、政策的判断の無さ、観光に対する知識の無さが多くを占めると言っても過言ではない。例えば、

・パキスタン航空の観光旅客に対する割引制度の貧困さ、併せて非イスラム人へのアルコールサービスさえもない（マレーシア航空、ガルーダ航空ではアルコールサービス有）。

・入国手続きの不効率さ（日本では到着便が重なり、入国審査官を増員し対処するが、そんな配慮をしようとはしない。客

を待たせても平気である）。

・日本にパキスタン政府観光事務所がない。観光客増進を図る国々では日本に複数の事務所を置いてるのが普通である。

・パキスタン政府観光省のこれからの努力、改善を期待したい。

・世界の屋根とも言われるヒマラヤ山脈、カラコルム山脈、ヒンズークーシ山脈が一緒に顔を合わせる場所（三山脈合流点）はパキスタン以外になく、その景観は圧倒的で素晴らしいから。

お知らせ

「千葉市国際交流プラザ会議室」が借用できます

千葉市国際交流プラザはJR千葉駅に隣接したセンシティータワー十二階という極めて立地条件の良い処にあります。同プラザの会議室が千葉市国際交流協会会員でもある当会上田事務局長の尽力により無料で借用可能になりました。同プラザは千葉市在住者優先の方針のため、当会千葉支部名で申請し認可されたものです。

早速、当会の新事業である「開発教育小委員会」の立ち上げ設立会議に借用しておりま。今後とも千葉市在住者中心のイベントには、同プラザ会議室を積極的に活用していきたいと考えています。会員各位も今後同プラザ会議室活用を念頭に置いて頂ければ幸いです。詳しくは当会事務局にお問い合わせ下さい。

会員活動紹介

影山 洵氏（サモア／ジャマイカ、四街道市）**四街道市で講演**

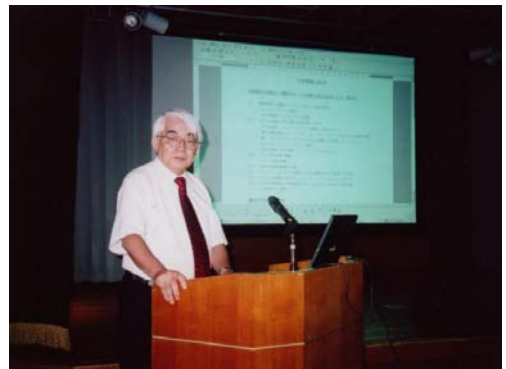
六月十七日、影山会員が四街道市教育委員会社会教育課主催の第一回国際理解講座「海外シニアボランティアってなあに」に出演され、外国の文化の違いについて講演されました。場所は四街道市わろうべの里で対象は一般市民、四街道市国際交流協会会員の三十一名でした。



藤田俊夫氏（ヨルダン／パキスタン、柏市）**柏市中央公民館で講演**

七月二十二日、藤田会員が柏市国際交流協会主催の講演会で「日本人オイルマンが見た中東情勢」という題で講演されました。同氏は長年カタールなどでの石油開発に従事され、その間の経験をもとに、現在の中東情勢の見方、中東の歴史、石油情勢について詳しく解説され約五〇

名の聴衆を魅了しました。



中川安隆氏（ヨルダン、浦安市）
宮崎 泰氏（タイ、浦安市）
浦安市市民会議委員に就任



中川安隆氏



宮崎 泰氏

ご両氏は平成十八年八月に就任されました。

【中川安隆氏談】

この度、「第二期基本計画策定浦安市市民会議委員」の委嘱を受け、八月二十九日より活動を開始しました。
公募枠百名に二百六名が応募し、全員採用となった未来志向型ボランティア活動です。
平成二十年度から二十九年度までの十年間を対象にし、市長宛の提言書を作成するためのもので、六つの分科会で実質的な討議が行われます。私は国際交

流、地域活動・観光振興などの「市民活動・交流分科会」で活動予定です。
浦安市の未来理想像を描く作業に、JICAの海外派遣で得た経験を活かして参加し、微力ながらも少しでも貢献出来ればと念願致しております。

平成十八年春募集シニア海外ボランティア体験談&説明会

本年春のJICAシニア海外ボランティア体験談&説明会が昨年同様、千葉市と船橋市で開催されました。当会からは両会場にそれぞれ体験談発表二名、よろず相談員二名が参加しました。現地事情、健康管理、安全管理、言葉、コミュニケーションなどについて説明・質疑がありました。特に船橋会場は今までで最高の百四十名という参加者で、よろず相談員も来訪十数名の対応に追われました。

千葉会場

十八年四月六日（木）
千葉市民会館小ホール
十八時三十分～二十一時
体験談発表者
増田定雄氏（コスタリカ、千葉市）
林 敬三氏（ブータン、千葉市）

よろず相談員
梅谷陽子氏、山本茂穂氏
来場者：約三十名
来訪相談者：二名

船橋会場

十八年四月二十三日（日）
船橋市中央公民館
十時三十分～十二時三十分
体験談発表者
平田輝雄氏（パラグアイ、パナマ、柏市）

小久保亮一氏（ヨルダン、千葉市）

よろず相談員
梅谷陽子氏、上田義晴氏
来場者：約百四十人
来訪相談者：十数名

東南アジア派遣&常磐線沿線在住SV懇親会

八月三十一日柏市で有志が集まり、盛会でした。



会員動静

本年の新会員は次の方々です。（敬称 略）

竹花 晃
ネパール 文化 印西市
中島敏雄
パプアニューギニア
輸出促進・市場開拓 千葉市
寺田博義
タイ 環境問題 いすみ市
大西周作
ボリビア
産業廃棄物処理 千葉市
清水宣雄
バングラディッシュ
ハンドボール 鴨川市

役員人事

貝沼憲男
サモア 電力土木 佐倉市
伊藤英彦
パプアニューギニア
観光事業 柏市

総会で平成十八年度の役員として次の諸氏が選出されました。

会長 品川洋之助
（鎌ヶ谷市）
副会長 梅谷陽子
（大網白里町） 「総務」
副会長 黒田昭太郎
（柏市） 「広報」
事務局 上田義晴
（千葉市） 「渉外」
幹事 山本茂穂
（千葉市） 「広報」
幹事 後藤 優
（千葉市） 「会計」
幹事 増田定雄（新任）
（千葉市） 「小委員会」
会計監査 泉岡輝元
（松戸市）
（注）「」内は総会後決定された担当です。

退任 山本修身氏
同氏は当会の創立時から三期役員を勤められました。

お詫言と訂正

会報第四号八頁三段の記事「ちば出前講座で熱演」の市名に誤りがありました。千葉市飯山満公民館は船橋市飯山満公民館の誤りでした。お詫びして訂正します。

第一回 千葉県シニア海外ボランティア報告会を開催

七月八日、浦安市国際センターで千葉県初のシニア海外ボランティア報告会が開催されました。JICA、千葉県JICAシニアボランティアの会、浦安市国際センターの共催で実施され、平成十七年帰国者を主体とする六名の方から現地での活動や派遣国の様子を中心とした報告が行なわれました。



OB会を中心に継続的に行うことで、地域の国際化にもつながるのではないかと。JICAではこのような活動を積極的に支援して行きたい」との挨拶がありました。

帰国ボランティアや浦安市民を中心に約四十名の参加者との「言語はどのように習得したのか。コミュニケーションに困らなかったか」などの活発な質疑応答があり、また派遣要請内容やその国の経済について熱心なやり取りが交わされました。一人二十分という短い持ち時間で二年間の活動や体験を報告するのは困難なことでしたが、多くの帰国ボランティアに話をしていただくことで、様々な国、アルゼンチン、パプアニューギニア、タイ、ベトナム、パキスタンについて各国の様子や活動の内容を紹介できたのではないでしょう。

文化・習慣の違いで活動することの大変さや現地の人とのふれあい、活動の成果を写真や資料を用いて分かり易く報告されました。報告者と報告タイトルは以下の通りです。

- 須郷隆雄氏（アルゼンチン／商業経営／流山市）
- 「愉快な国アルゼンチン」
- 福井凱男氏（アルゼンチン／貿易／船橋市）
- 「現地活動と生活事情」
- 中島敏雄氏（パプアニューギニア／輸出促進・市場開拓／千葉市）
- 「現地活動と生活環境」
- 寺田博義氏（タイ／環境問題／いすみ市）
- 「タイ・バンコクでの

JICAシニア海外ボランティア活動について」

片岡工氏（ベトナム／企業管理／大網白里町）

「ベトナム素描 その光と影」

木村亮彦氏（パキスタン／観光施設／千葉市）

「観光における任国事情」

最後に品川会長より、参加者へのお礼とともに閉会の挨拶があり、第一回目の報告会は盛況のうちに閉会しました。また今回の反省も踏まえ、定期的にこのような報告会を実施し、一般市民の方に国際協力やボランティア事業を理解していただくとともに、ボランティア間のネットワークを広げたいと考えています。

（大山美砂子 JICA 千葉県国際協力推進員）

【編集担当者より】

福井、中島、寺田、片岡、木村各氏の報告の内容は本会報の四六頁の『会員寄稿（帰国報告会報告内容）』に掲載しました。なお題名は報告会でのタイトルから変更されたものもあります。須郷氏の報告の内容は会報の昨号（本年二月発行）の『会員寄稿』に掲載されており

開発教育小委員会発足

当初初めての公式プロジェクトチームとして発足しました。メンバーは片岡、木村、斎藤（富貴子）、寺戸、堀端各会役員、上田、後藤、増田、山本各役員で、増田役員が委員長を務



第一回会合（千葉市国際交流プラザにて）

めます。当会活動拡大の一環として千葉県、県内市町村の実施する国際理解・開発教育分野への会員の講師派遣を推進しようというものです。準備委員会は今秋を目処に当会のPR方法、候補講師の紹介方法などを立案し役員会に答申、成案を得たのち全会員に呼びかけることとなつていきます。第一回会合を七月二十日、第二回会合は八月十七日に開催されました。

【増田小委員長談】

「開発教育」という言葉は一般に馴染みにくい表現で、たとえば「国際理解教育」と読み替えることも考えています。九月度の第三回検討会で当活動の基本方針、諸組織に働きかける提案書内容（講師提供のメニューリスト含む）、活動の内規（取決め）等の整備を終了し、活動開始の最終段階に入っています。先々は当会導入予定のホームページにも掲載し広く活動の理解を求めることとしたいと考えております。

（山本茂穂）

CCCB便り

（財）ちば国際センター（Chiba Convention Bureau and International Center）の活動は、コンベンションの振興と国際交流・協力の促進の二つの柱から成っています。その中の千葉県国際交流センターにJICA国際協力推進員が席を置き、千葉県とJICAの橋渡しをしてまいります。



写真は高橋千葉県国際交流センター長と大山さん

（大山美砂子）

編集後記

会報5号をお届けします。千葉SV会の活動も新しい局面を迎え、帰国報告会の実施、開発教育小委員会の発足・検討開始と記事の項目がさらに増えました。さらに、会員諸氏の地域での活動を積極的に紹介することにも努めました。情報伝達の迅速化をはかるため当会のホームページの立ち上げも検討中です。今後とも会員の皆様の一層のご協力を得て当会の広報活動を充実し、国際協力・理解・交流活動の一助となるよう念じております。

（黒田昭太郎）

本紙へのご意見、ちば出前講座のお問い合わせは下記にお願いします。

千葉県JICAシニアボランティアの会
（The Association of JICA Senior Volunteers in Chiba）
04-7131-5830（黒田）

千葉県国際協力推進員
043-297-0245（大山）
jicadpd-desk-chibaken@jica.go.jp